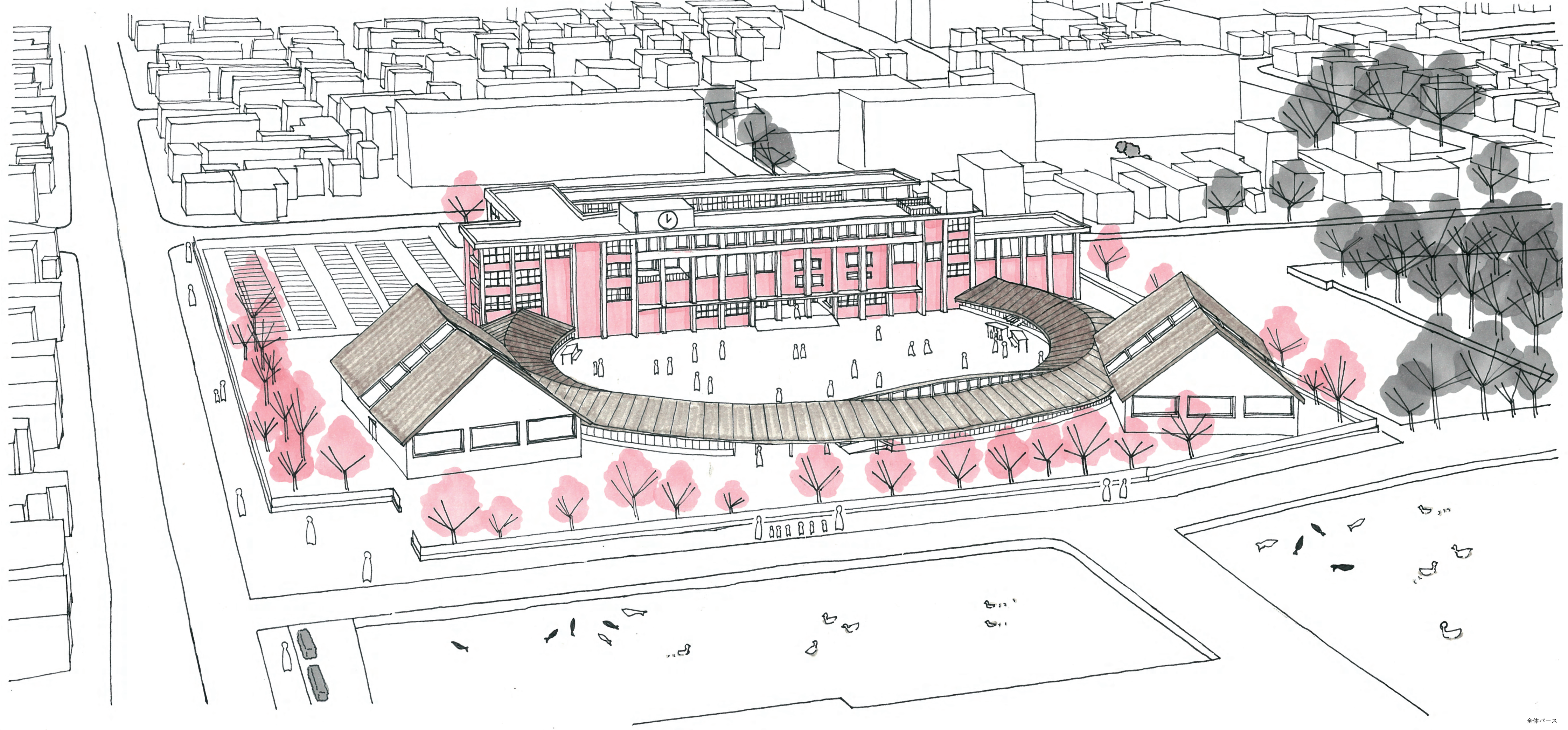
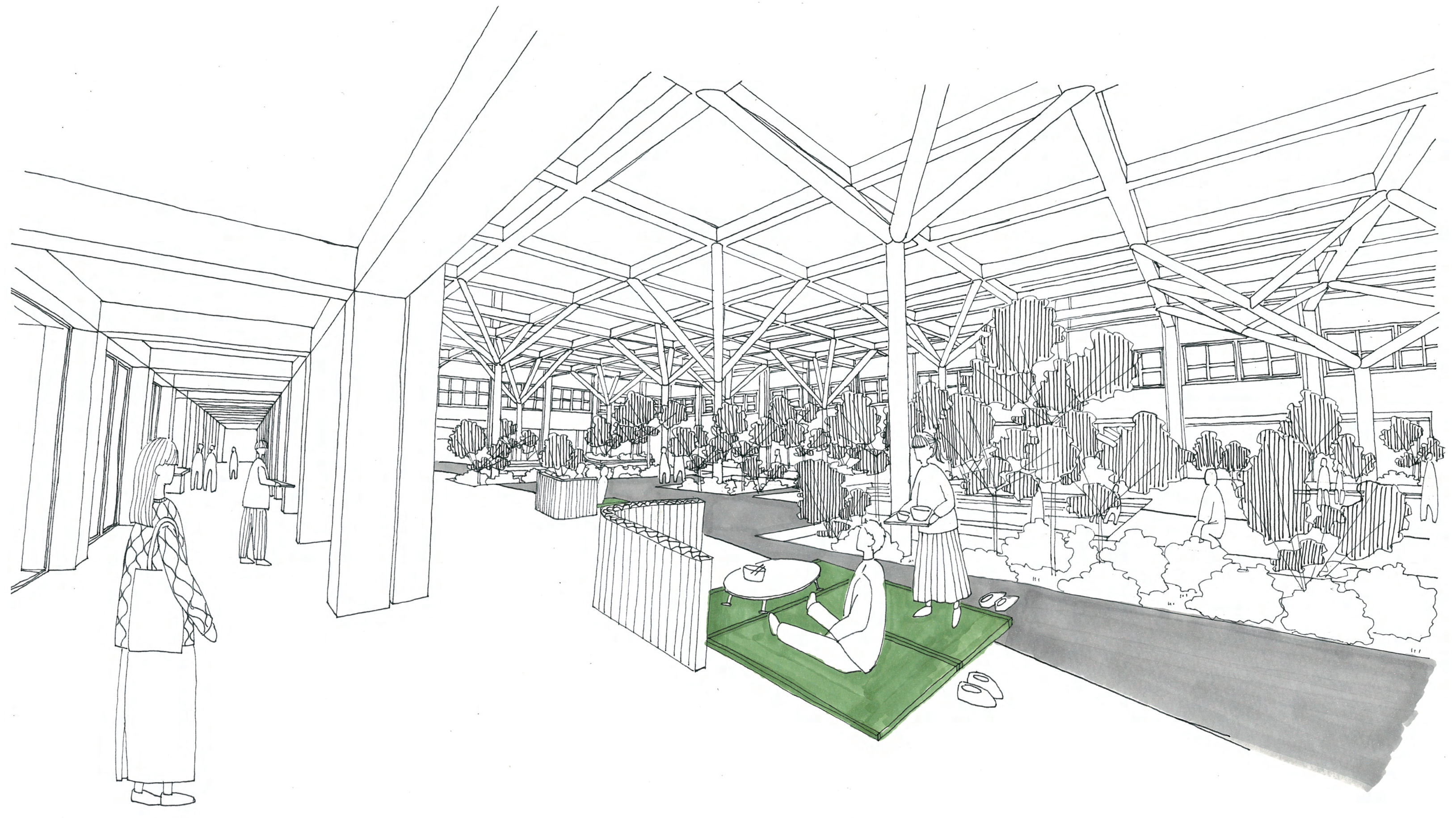
あいばせ - 畳から始まる建築家と利用者の空間設計 -

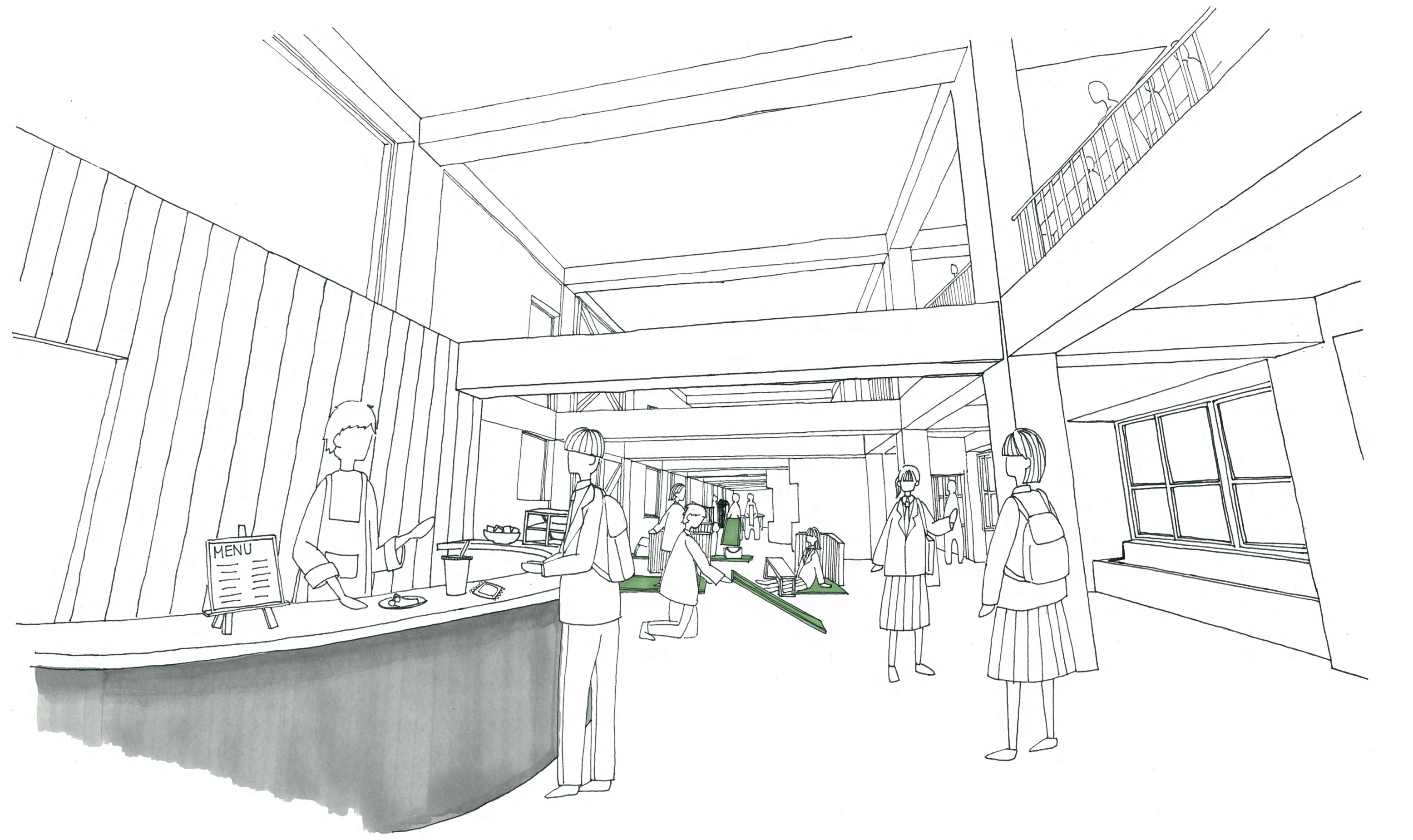
佐藤研究室　222054　雪下 美咲



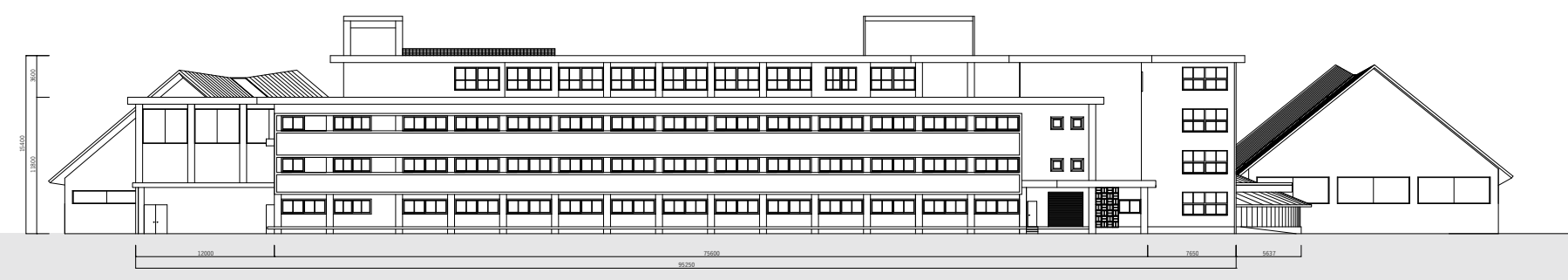
全体パース



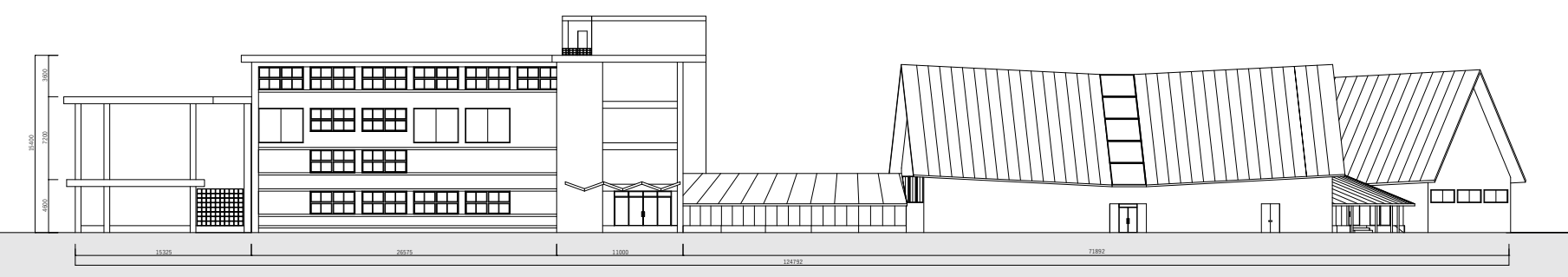
校舎中庭パース



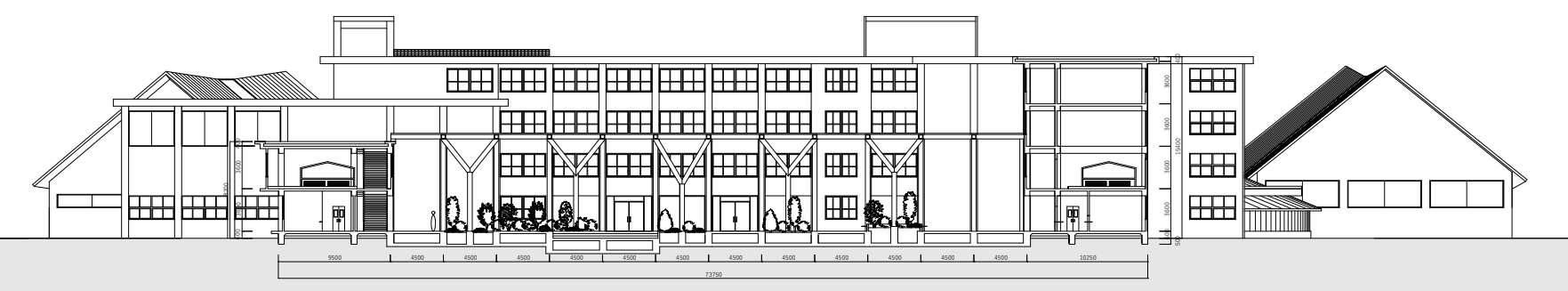
共有ワークスペース パース



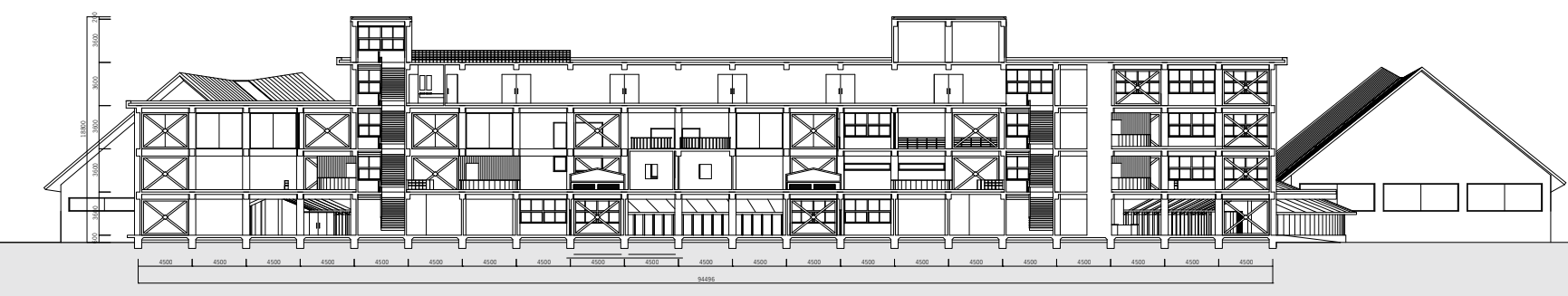
北側立面図　1：300



西側立面図　1：300



C-C' 断面図　1：300



D-D' 断面図　1：300

Concept

畳を使って空間を再編集する

今回の設計の核になるのは、畳の空間を切り取る力である。

畳の歴史は古く、権力の象徴として部分使いされてきた平安時代からの変遷を経て、今では床材として建物の一部のように扱われている。

しかし、その使われ方も変化を迎えているのではないか。今、畳はもっと手軽なものとして受け入れられているように感じる。その例が"置き畳"である。従来の畳よりも軽くて簡単に持ち運べるこれらは、ホームセンターに何食わぬ顔で置かれていた。そして、日本人の心に強く根差している畳は置かれるだけで空間を異質なものに変える力を持っている。持ち運びの利便性を獲得した畳は、誰でも空間のハッキングができる材料になったことに気づいた。

畳の新しい可能性を切り開くため、畳に「建物の利用者が自由に空間を編集するための道具」という役割を付与し、これを核にすることで設計を行う。

この建物の利用者は、ちりばめられた畳ステーションから畳を引っ張り出し、床に敷くことで自分の使いたいスペースを獲得していく。その陣地は人の量、個人のパーソナルスペースによって代わるので同じ配置になることはない。この建物に訪れる度に自由に置かれる畳は、設計者の意図を超えたところで展開されていく。

学校のリノベーションの新しいかたちを提案

少子化の現代で廃校となる学校は着実に増えている。そんな中、廃校をリノベーションすることは建築のトレンドの1つであるように思う。廃校が地域の交流拠点になったり、ホテルとして宿泊できるようになったり、学校という誰もが通ってきたなじみ深い建築に対して新しい付加価値を見出そうと様々な取り組みが行われいる。

私は、畳という古くからあるものに対して新しい使い方を提案するという研究の構図を学校のリノベーションに重ねたい。私が目指すリノベーションの姿は、昔から愛されてきた学校の面影を残しながら、市民と観光客の新たな活動拠点になるような"市役所"だ。

私が選んだ学校と敷地は、すでに市役所としての機能が付与されている。しかし、市役所として十分に機能できるほどの改修がされておらず、高校だった建物のまま時が止まっている。学校に対して行政機能が入っているという部分に新しさを感じることができるのに、そのポテンシャルが活かしきれていないのだ。敷地調査を進めるうちにどんどん見えてきた敷地のポテンシャルと、それを持て余している現状に対して、私ができることはなにか。

長岡造形大学に畳を設置して自由に使ってもらうという実験を経て、とても空間に馴染んでいるとは言えない畳が次々と受け入れられる様子を見た。このことから、畳はどこに置かれていても心理的に受け入れることができる素材であるということが分かった。私がこの学校の現状を打破するために使うのは、畳の空間を切り取る力である。どんな空間でも自分の色に染めてしまう畳を使うことで、これまでにないリノベーションの形を追求したい。

畳で空間の再編集 × 学校のリノベーション＝新しい市役所、地域の活動拠点

耐震補強

元の建物は耐震補強がされていないため、二つのアプローチから耐震を試みる。

減築

建物自体の重量を軽くすることで地震力に耐える。

今回の設計では元の学校っぽさを残しながら広い空間をつくることを目指しているので、外側の雰囲気は残すために極力外構をいじらず、内側を抜くことで耐震性とデザイン性を兼ね備える。

中庭に新しく屋根をかけて室内空間を作るため、1階の中庭に面する壁は取り払うことで開放感を出す。
2階と3階の吹き抜け空間をつくることで、昔ながらの学校では見ることができない新しい空間づくりを行う。

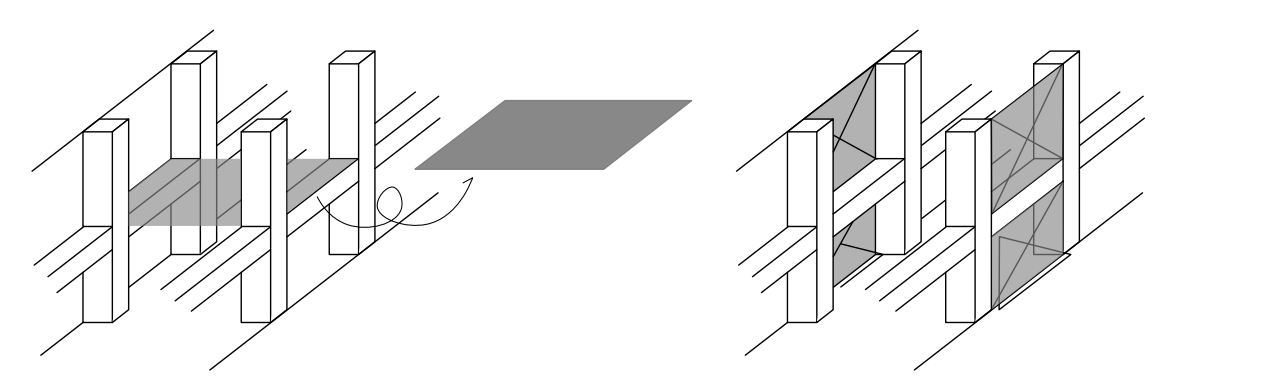
＋

増築

ブレースを入れることで地震力に耐える。

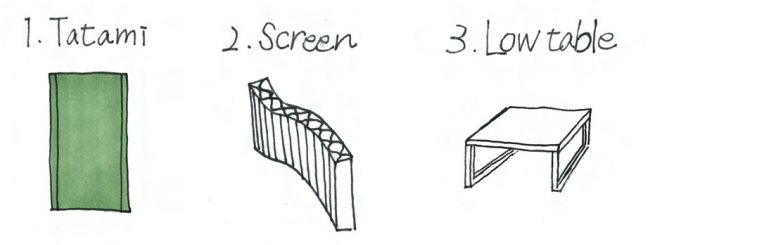
一般的な学校の耐震補強と同じく、要所にブレースを入れることで耐震性を高める。内側の壁に取り付けることで外観を損なわない。

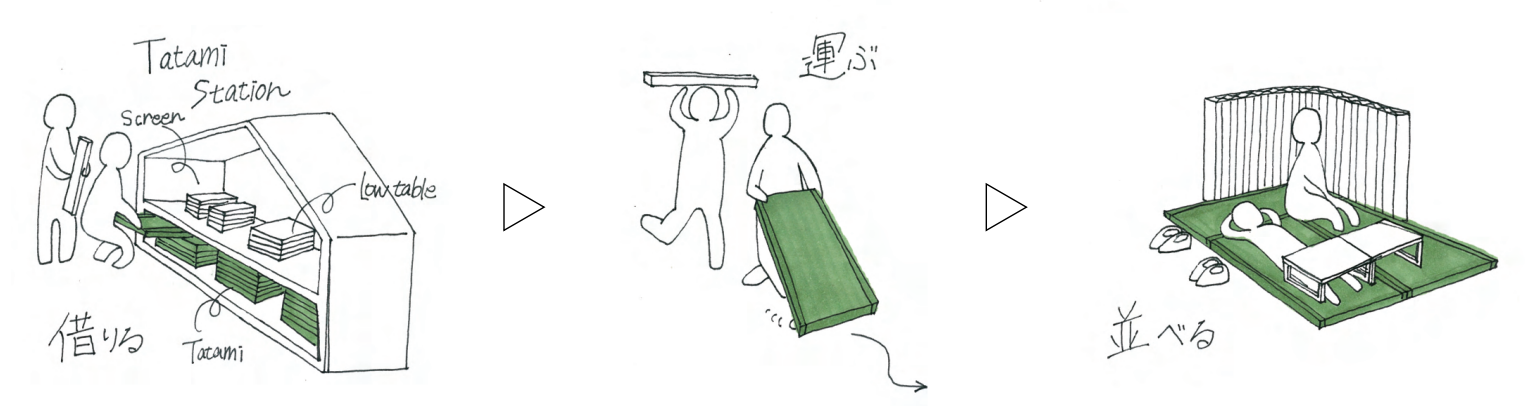
学校という性質を活かすうえで開口の多さをそのまま採用したため、ブレースを入れることで開口部の明るさはそのままに耐震補強を行う。また、吹抜けを作ったことで崩れた床面のバランスをブレースによる補強で補う。

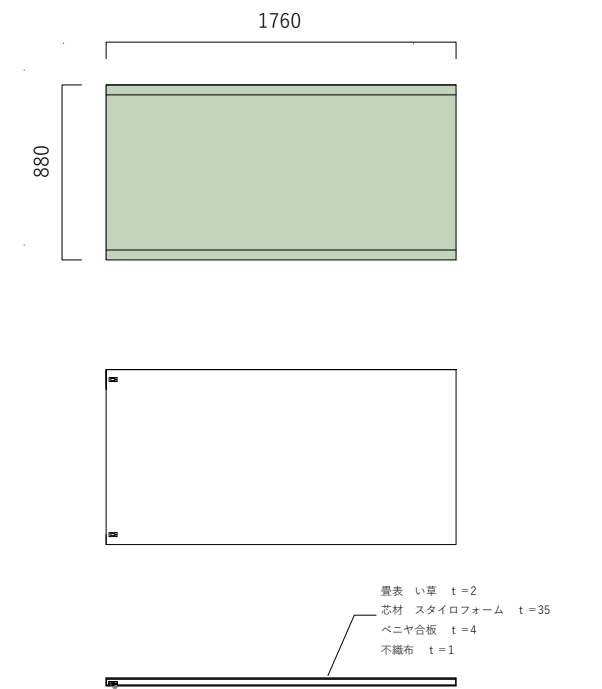


How to 畳

この建物では決まった場所に机やイスはほとんどありません。自分たちで座りたい場所に空間を作る必要があります。空間を作るためには、畳ステーションに置いてある畳、衝立、ちゃぶ台を使ってください。床がある場所すべてにこれを置くことができます。畳は必ずしも綺麗に敷く必要はありません。3つの道具を使って、建物のあちこちに居心地の良いスペースを作ってください。







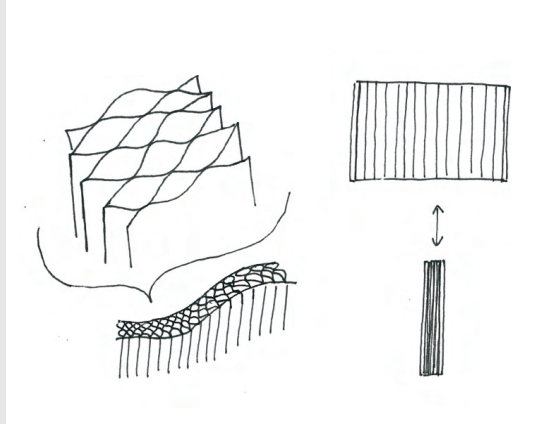
畳　平面 断面図　1：20

How to 衝立

ハニカム構造の衝立です。

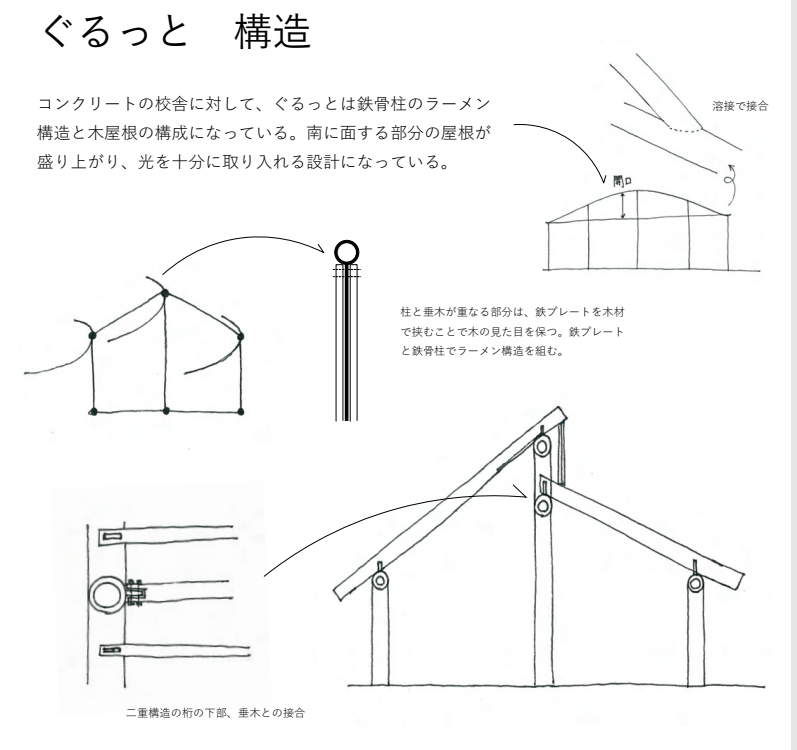
和紙が引き延ばされることでハニカム構造が現れ、自立した衝立になります。普段は折りたたんで薄く収納できるので、畳ステーションにひっそりと置かれています。

畳にそってカーブした形をつくることができるため、視線が気になる場所にピンポイントで置いてください。



ぐるっと　構造

コンクリートの校舎に対して、ぐるっとは鉄骨柱のラーメン構造と木屋根の構成になっている。南に面する部分の屋根が盛り上がり、光を十分に取り入れる設計になっている。



柱と垂木が重なる部分は、鉄プレートを木材で挟むことで木の見た目を保つ。鉄プレートと鉄骨柱でラーメン構造を組む。

二重構造の桁の下部、垂木との接合

対象敷地　福島県会津若松市追手町第二庁舎（旧：若松女子高）

1．敷地選定の理由

畳の新しい活用方法を見出すことを卒業研究の設計テーマとして定めていたため、畳を活用できる場所を考えたときに、地元の会津若松市は歴史を観光資源にしている土地なため畳との親和性が高かった。また、新しい空間を畳を使って生み出すという活用方法を活かすためには、沢山の人が出入りする建物にする必要があった。そこで目を付けたのは会津若松市役所第二庁舎だ。

2．敷地と建物の現状

もともと女子高だった建物が校舎の移転にともない市に引き取られ、現在は第二庁舎として使われている。市役所改修の際は仮設市役所として使われていた。

現在の建物は 1965 ～ 1968 年に建てられた校舎で、耐震補強は行われていない。若松女子高（現：学鳳高校）は男女共学化と中学校併設を受けて一箕町に新校舎を移転。残された建物は人が集まる立地なため、校庭がイベントの際の駐車場として使われることもある。しかし調査の結果、現在は使われている空間が 1 階、2 階の数個の教室だけであり、上階部分は物置として使われる以外の活用がされていない。全体的に建物を持て余している印象を受けた。

この敷地は観光スポットである鶴ヶ城に隣接しており、観光客の往来が多い環境にある。しかし、現状の建物が市役所としての機能に乏しく、訪れる人もほぼいないため寂れた印象をぬぐい切れない。市が所有する建物なのに日常的に市民が立ち入ることができない環境と雰囲気は、せっかくの人が集まる立地を活かしきれていないと考えた。それでも観光客が日常的に敷地の脇を通るこの場所からは、活気を生み出すポテンシャルを感じる。

3．活用方法

そこで私が目を付けたのが、会津若松市役所第一庁舎の改修である。2025 年に改修工事の完了をうけて市役所が市民に開かれた場所になることが目指されていたが、執務空間は使いやすく改修されていたものの元の敷地の大きさの制限があり、アオーレ長岡のように市民が自由に入り込むスペースが足りていないように感じた。ここに第二庁舎が市民に開かれるための建物としてリノベーションをすることができれば、会津若松市の"市民が楽しいことをできる場所"という位置づけに入ることができると考えた。

今回の設計でターゲットにしたいのは、市民、観光客、そして高校生である。この周辺は移転した学鳳以外の公立高校が敷地の半径 1 ㎞圏内にあり、私立も含めれば 1.5 ㎞圏内に市内のすべての高校がある。また、市内には学習塾以外で勉強ができる場所も市の図書館以外になく、テスト期間になると席の少ない図書館で勉強することが難しいのでカフェに高校生が溢れかえる光景が日常的だ。この立地は高校生が日常的に集まりやすいことに加えて、以上のような高校生の勉強事情を含め、高校生が使いに来たくなる設計を目指した。また、かつて"高校生"だった若女、学鳳の卒業生もターゲットに入れられるような設計を行う。

4．設計方針

以上の敷地現況をうけ、市民が集まる気候に左右されないイベントスペース、観光客も利用できるようなフードコート風の飲食店、高校生や社会人が利用できる共有ワーキングスペースの三軸を設計に取り入れることで校舎と敷地を活用する計画を立てた。現在市役所として使われている機能はそのままに、過剰に余っていた空間をこれに充てる。そして、この建物に思い入れのある同窓生、市民が大人数で集まることができる宴会場を入れ込むことで、市民に受け入れられるような空間を作っていく。

敷地の歴史を反映させ、市民、観光客、高校生に向けた空間づくり、畳の活用というテーマを入れることで、学校のリノベーションという建築のトレンドに対して新しい答えを作り上げる。

若松女子高等学校　年表

1924	若松実業女学校　裁縫、家庭科が主な授業
1935	若松市実業女子青年学校
1937	旧会津中学校敷地（追手町）に移転
1940	福島県若松実科高等女学校（4.15　創立記念日）
1942	若松高等女学校
1944	学徒動員
1947	福島県立若松高等女学校
1948	福島県立若松女子高等学校
1953	全日制家庭科が置かれる（普通科、家政科 3 年制）
1965 ～ 1968	新校舎建設
1985	学校家庭クラブ　研究指定校　研究発表会で文部大臣賞受賞 部活動で顕著な成績
2002	福島県立会津学鳳高等学校　男女共学化　総合学科へ転換
2003	中高一貫校教育の構想が始まる
2004	家政科、普通科の生徒が卒業　富士通工場跡地に新校舎建設　設計 原広司
2007	中学校入試が行われる 福島県立会津学鳳中学校併設　新校舎移転 部活動で顕著な成績
2010	学鳳ウォーク開始
2011	東日本大震災　第 2 体育館を避難所として解放（4.7 まで）
2016	SSH 指定

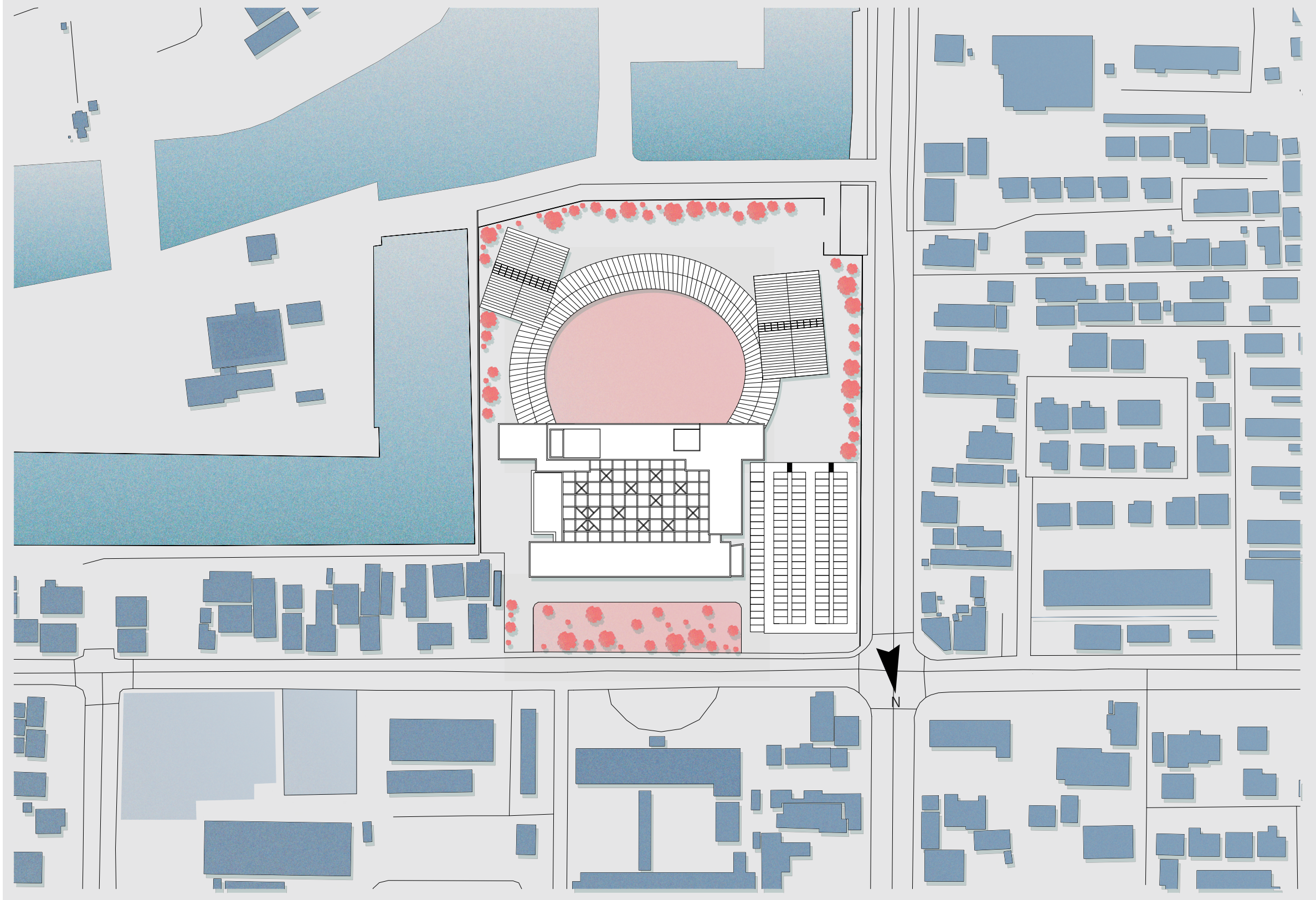
市役所複合型施設　あいばせ

あいばせ … 会津弁で「一緒に行こう」

1F　くいっちい（フードコート）
　　ぐるっと（イベントエリア）
2F　市役所　会議室
　　共有ワークスペース　けっぱれ
3F　市役所　予備室
　　共有ワークスペース　けっぱれ
4F　あいべ（貸し宴会場）

1．玄関	13．観覧席
2．駐車場	14．市役所執務室
3．飲食店	15．会議室
4．男性トイレ	16．共有ワークスペース
5．女性トイレ	17．下駄箱
6．休憩室	18．市役所予備室
7．管理事務所	19．宴会室
8．機械室	20．倉庫
9．電気室	21．調理場
10．武道場	22．食材管理室
11．男性更衣室	23．屋上貯水室
12．女性更衣室	☆．畳ステーション

- - - - - 利用動線
- - - - - 管理動線
- - - - - 市役所動線

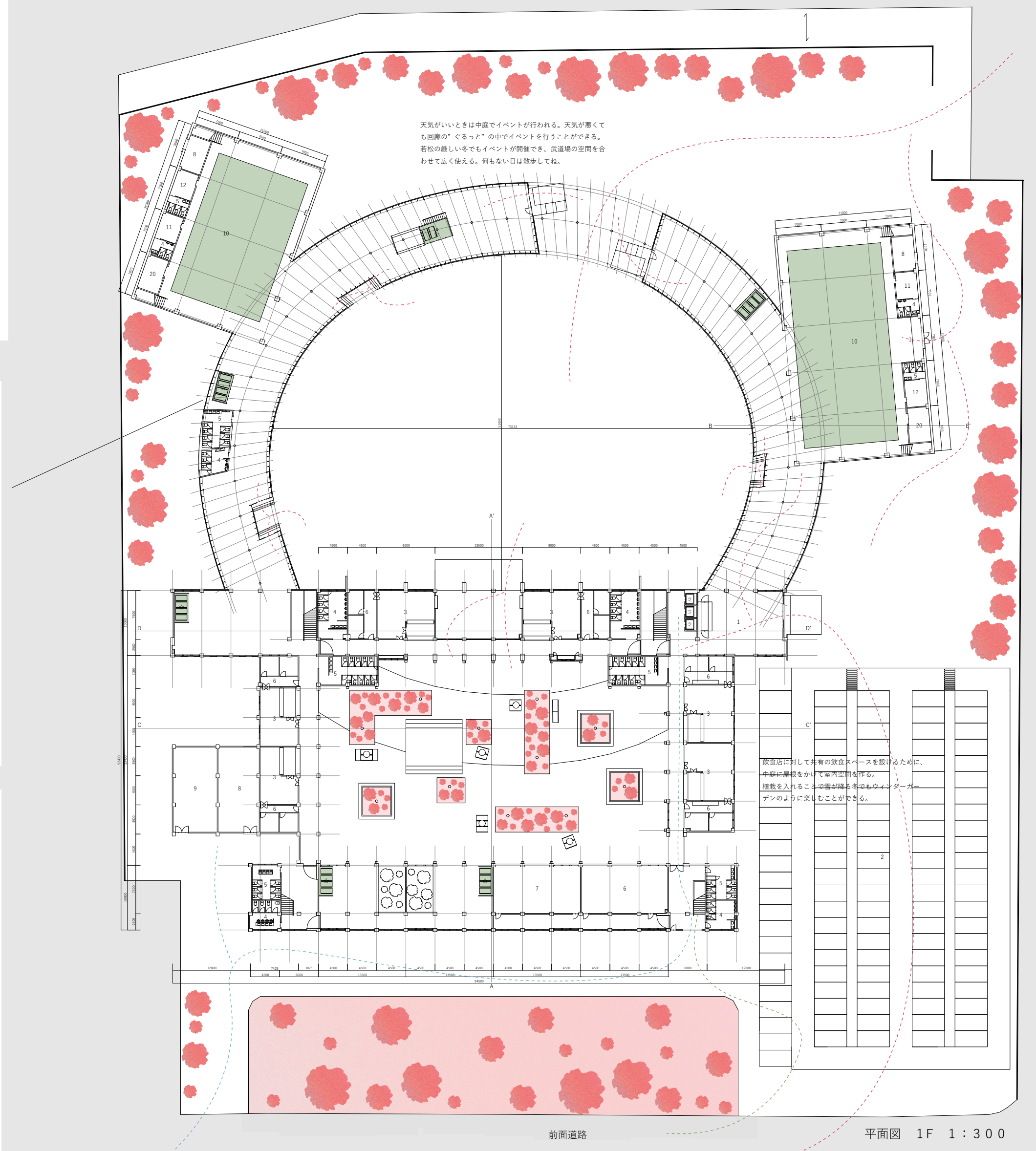


配置図　1：800

敷地境界と道路が隣接しているのでセットバックして歩行者用道路をつくる。
車は一方通行だが通行量が多い。
セットバックした部分に歩行者用の入口を設ける。

天気がいいときは中庭でイベントが行われる。天気が悪くても回廊の"ぐるっと"の中でイベントを行うことができる。若松の厳しい冬でもイベントが開催でき、武道場の空間を合わせて広く使える。何もない日は散歩してね。

飲食店に対して共有の飲食スペースを設けるために、中庭に屋根をかけて室内空間を作る。
植栽を入れることで雪が降る冬でもウィンターガーデンのように楽しむことができる。



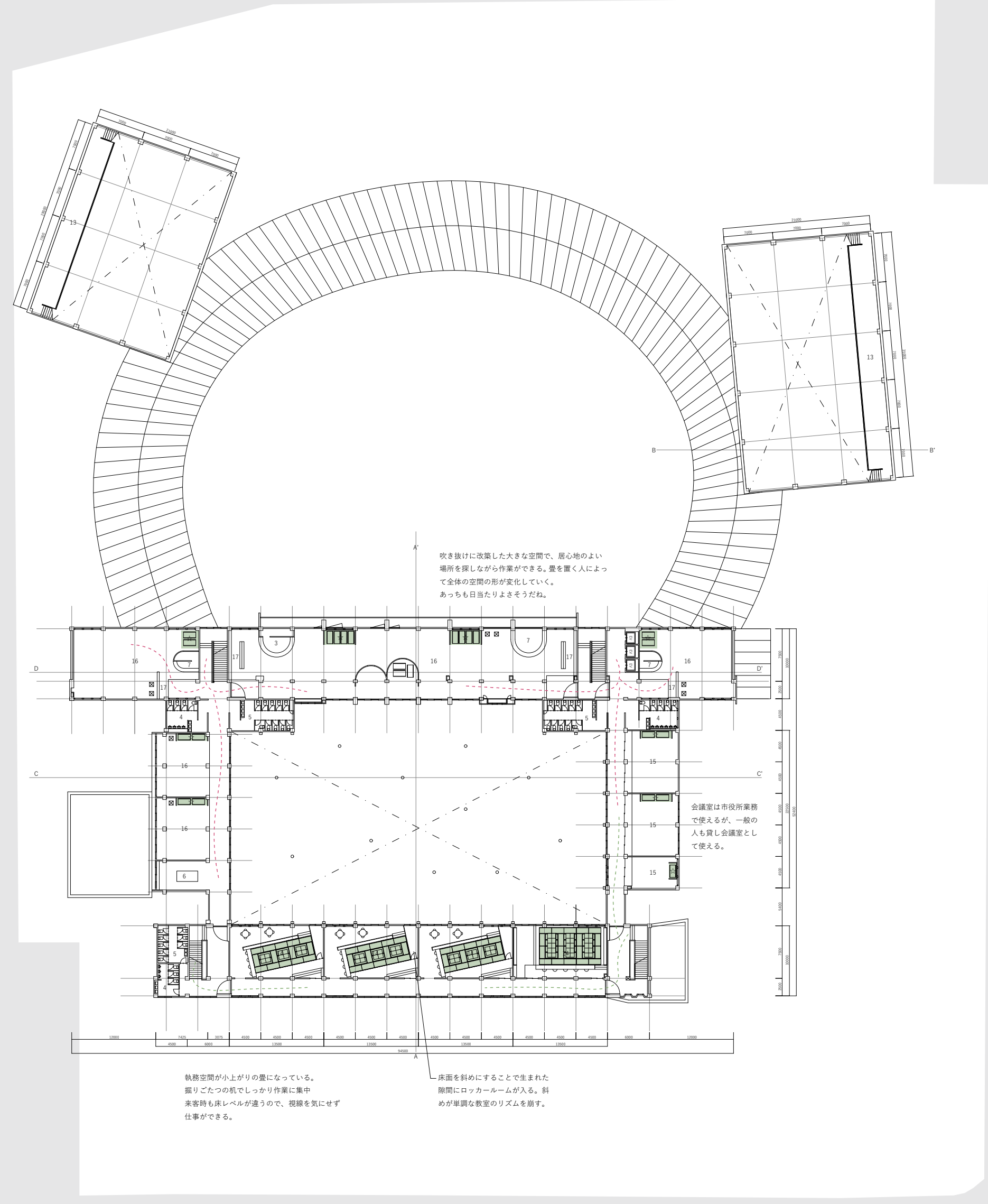
平面図　1F　1：300

吹き抜けに改築した大きな空間で、居心地のよい場所を探しながら作業ができる。畳を置く人によって全体の空間の形が変化していく。
あっちも日当たりよさそうだね。

会議室は市役所業務で使えるが、一般の人も貸し会議室として使える。

執務空間が小上がりの畳になっている。
掘りごたつの机でしっかり作業に集中
来客時も床レベルが違うので、視線を気にせず仕事ができる。

床面を斜めにすることで生まれた隙間にロッカールームが入る。斜めが単調な教室のリズムを崩す。



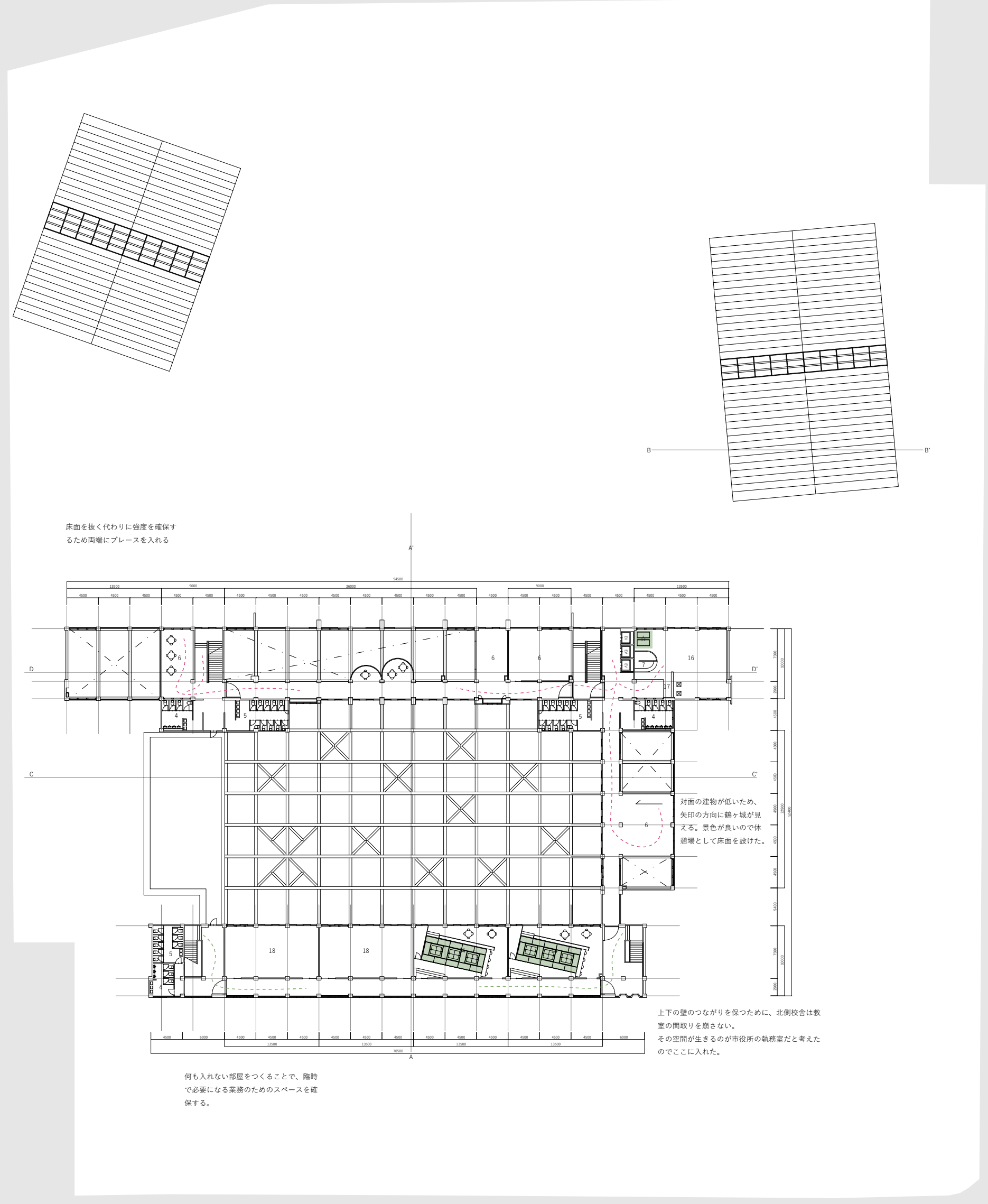
平面図　2F　1：300

床面を抜く代わりに強度を確保するため両端にブレースを入れる

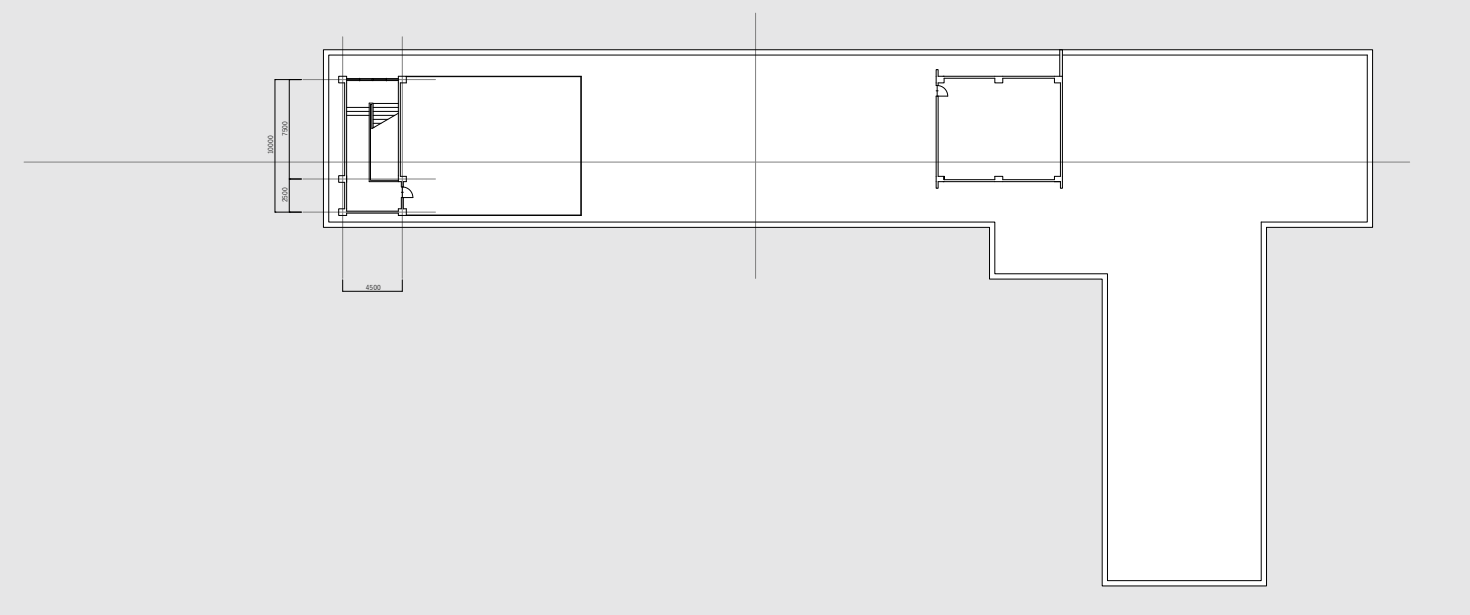
対面の建物が低いため、矢印の方向に鶴ヶ城が見える。景色が良いので休憩場として床面を設けた。

上下の壁のつながりを保つために、北側校舎は教室の間取りを崩さない。
その空間が生きるのが市役所の執務室だと考えたのでここに入れた。

何も入れない部屋をつくることで、臨時で必要になる業務のためのスペースを確保する。

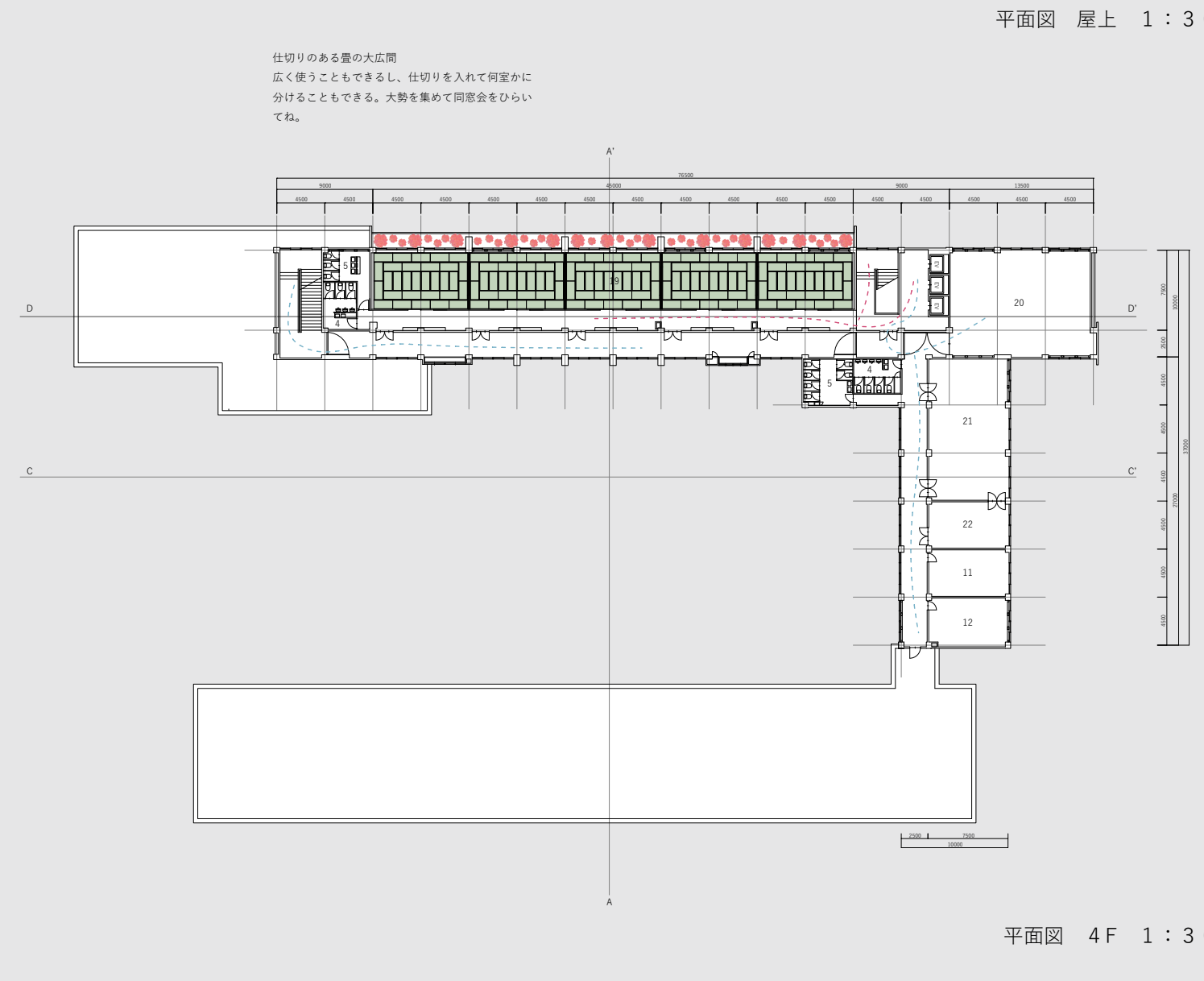


平面図　3F　1：300

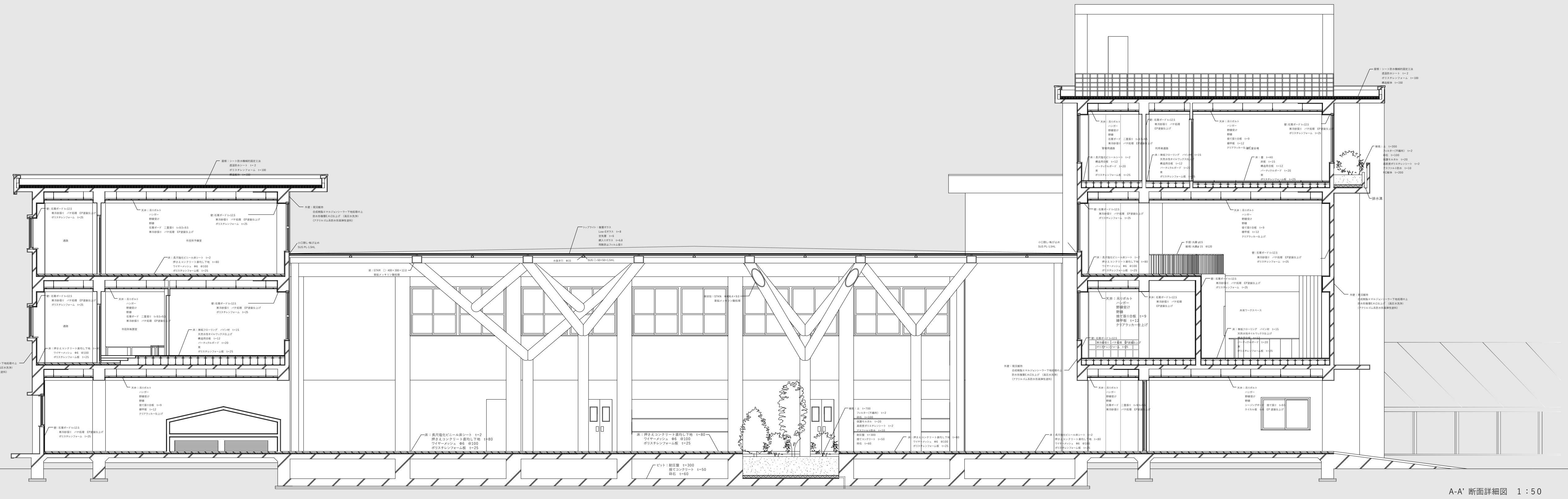


平面図　屋上　1：300

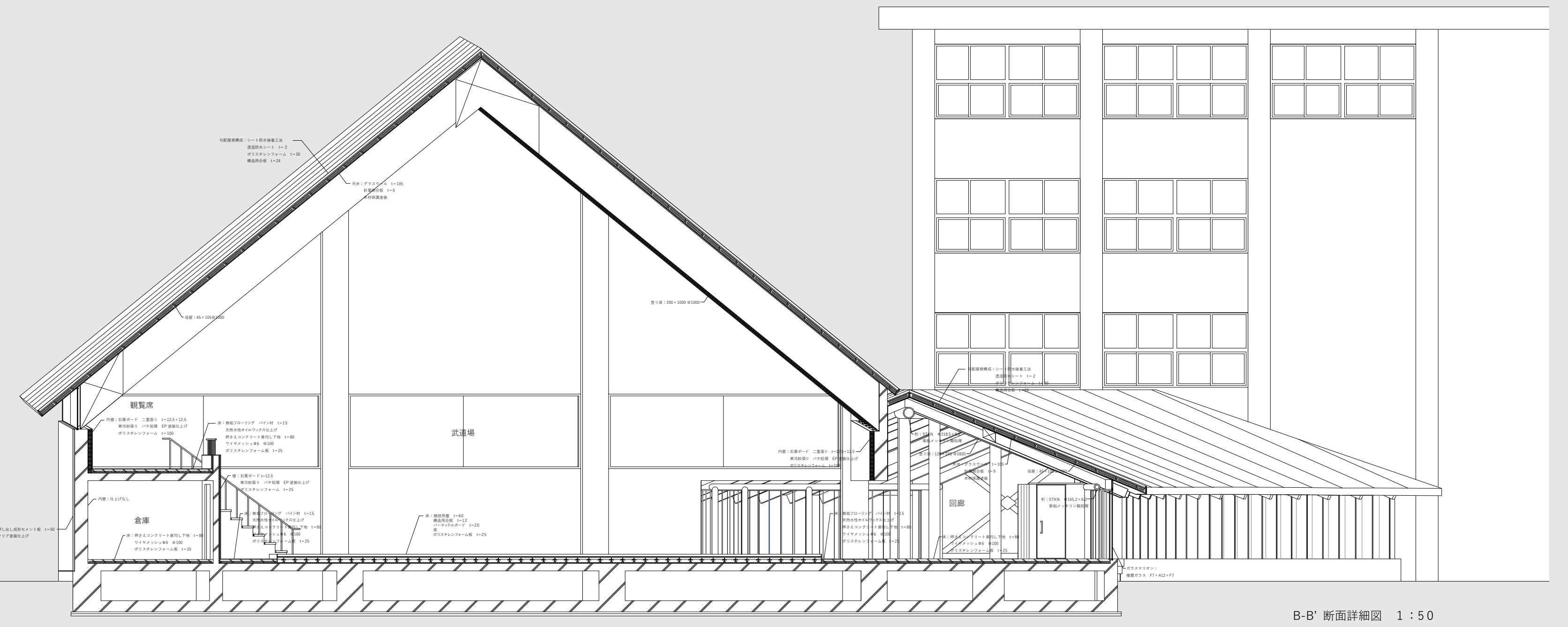
仕切りのある畳の大広間
広く使うこともできるし、仕切りを入れて何室かに分けることもできる。大勢を集めて同窓会をひらいてね。



平面図　4F　1：300



A-A' 断面詳細図　1：50



B-B' 断面詳細図　1：50